

月夜と眼鏡

小川未明

青空文庫

町も、野も、いたるところ、緑の葉に包まれているところでありました。

おだやかな、月のいい晩のことであります。静かな町のはずれにおばあさんは住んでいましたが、おばあさんは、ただ一人、窓の下にすわって、針仕事をしていました。

ランプの灯が、あたりを平和に照らしていました。おばあさんは、もういい年でありましたから、目がかすんで、針のめどによく糸が通らないので、ランプの灯に、いくたびもすかしてながめたり、また、しわのよった指さきで、細い糸をよったりしていました。

月の光は、うす青く、この世界を照らしていました。なまあたかな水の中に、木立も、家も、丘も、みんな浸されたようであります。おばあさんは、こうして仕事をしながら、自分の若い時分のことや、また、遠方の親戚のことや、離れて暮らしている孫娘のことなどを、空想していたのであります。

目ざまし時計の音が、カタ、コト、カタ、コトとたなの上で刻んでいる音がするばかりで、あたりはしんと静まっていました。ときどき町の人通りのたくさんな、にぎやかな巷の方から、なにか物売りの声や、また、汽車のゆく音のような、かすかなとどろきが聞こえてくるばかりであります。

おばあさんは、いま自分はどこにどうしているのすら、思い出せないように、ぼんやりとして、夢を見るような穏やかな気持ちですわっていました。

このとき、外の戸をコト、コトたたく音がしました。おばあさんは、だいぶ遠くなった耳を、その音のする方にかたむけました。いま時分、だれもたずねてくるはずがないからです。きつとこれは、風の音だろうと思われました。風は、こうして、あてもなく野原や、町を通るのであります。

すると、今度、すぐ窓の下に、小さな足音がしました。おばあさんは、いつもに似ず、それをききつけました。

「おばあさん、おばあさん。」と、だれか呼ぶのであります。

おばあさんは、最初は、自分の耳のせいでないかと思いましたが。そして、手を動かすのをやめていました。

「おばあさん、窓を開けてください。」と、また、だれかいました。

おばあさんは、だれが、そういうのだらうと思つて、立つて、窓の戸を開けました。外は、青白い月の光が、あたりを昼間ののように、明るく照らしているのであります。

窓の下には、脊のあまり高くない男が立つて、上を向いていました。男は、黒い眼鏡を

かけて、ひげがありました。

「私は、おまえさんを知らないが、だれですか？」と、おばあさんはいいました。

おばあさんは、見知らない男の顔を見て、この人はどこか家をまちがえてたずねてきたのではないかと思いました。

「私は、眼鏡売りです。いろいろな眼鏡をたくさん持っています。この町へは、はじめてですが、じつに気持ちのいいきれいな町です。今夜は月がいいから、こうして売って歩くのです。」と、その男はいいました。

おばあさんは、目がかすんでよく針のめどに、糸が通らないで困っていたやさきでありましたから、

「私の目に合うような、よく見える眼鏡はありますかい。」と、おばあさんはたずねました。

男は手にぶらさげていた箱のふたを開きました。そして、その中から、おばあさんに向くような眼鏡をよつていましたが、やがて、一つのべっこうぶちの大きな眼鏡を取り出して、これを窓から顔を出したおばあさんの手に渡しました。

「これなら、なんでもよく見えること請け合いです。」と、男はいいました。

まどしたおとこた
窓の下の男が立っている足もとの地面には、白や、紅や、青や、いろいろの草花が、つきひかりう月の光を受けてくろずんで咲いて、香っていました。

おばあさんは、この眼鏡をかけてみました。そして、あちらの目ざまし時計の数字や、暦の字などを読んでみましたが、一字、一字がはつきりとわかるのでした。それは、ちょうど幾十年前の娘の時分には、おそらく、こんなになんでも、はつきりと目に映ったのであろうと、おばあさんに思われたほのです。

おばあさんは、大喜びでありました。

「あ、これをおくれ。」といって、さつそく、おばあさんは、この眼鏡を買いました。

おばあさんが、錢を渡すと、黒い眼鏡をかけた、ひげのある眼鏡売りの男は、立ち去ってしまいました。男の姿が見えなくなつたときには、草花だけが、やはりもとのように、夜の空気の中に香っていました。

おばあさんは、窓を閉めて、また、もとのところにすわりました。こんどは楽々と針のめどに糸を通すことができました。おばあさんは、眼鏡をかけたたり、はずしたりしました。ちょうど子供のように珍しくて、いろいろにしてみたかつたのと、もう一つは、ふだんかけつけないのに、急に眼鏡をかけて、ようすが変わったからでありました。

おばあさんは、かけていた眼鏡を、またはずしました。それをたなの上の目ざまし時計のそばにのせて、もう時刻もだいぶ遅いから休もうと、仕事を片づけにかかりました。

このとき、また外の戸をトン、トンとたたくものがありました。

おばあさんは、耳を傾けました。

「なんとという不思議な晩だろう。また、だれかきたようだ。もう、こんなにおそいのに……」

と、おばあさんはいって、時計を見ますと、外は月の光に明るいけれど、時刻はもうだいぶ更けていました。

おばあさんは立ち上がって、入り口の方にゆきました。小さな手でたたくと見えて、トン、トンというかわいらしい音がしたのであります。

「こんなにおそくなつてから……。」と、おばあさんは口のうちでいいながら戸を開けてみました。するとそこには、十二、三の美しい女の子が目をうるませて立っていました。

「どこの子か知らないが、どうしてこんなにおそくたずねてきました？」と、おばあさんは、いぶかしがりながら問いました。

「私は、町の香水製造場に雇われています。毎日、毎日、白ばらの花から取つ

た香水こうすいをびんに詰つめています。そして、夜よる、おそく家うちに帰かえります。今夜こんやも働はたらいて、独ひとりぶらぶら月つきがいいので歩あるいてきますと、石いしにつまずいて、指ゆびをこんなきずに傷きずつけてしまいました。私はわたし、痛いたくて、痛いたくて我慢がまんができません。血ちが出てでまりません。もう、どの家うちもみんな眠ねむつてしまいました。この家うちの前まえを通とおると、まだおばあさんが起おきかけておいでなさいます。私はわたし、おばあさんがごしんせつな、やさしい、いい方かただということを知しっています。それでつい、戸とをたたく気きになつたのであります。「と、髪かみの毛けの長い、うつくしし女ようじよはいいました。

おばあさんは、いい香水こうすいの匂においが、少しょうじよ女の体からだにしみていとみえて、こうして話はなしている間あいだに、ぶんぶんはなと鼻はなにくるのを感じかんしました。

「そんなら、おまえは、私わたしを知しっているのですか。」と、おばあさんはたずねました。

「私はわたし、この家うちの前まえをこれまでたびたび通とおつて、おばあさんが、窓まどの下したで針はり仕事じこをなささっているのを見みて知しっています。」と、少しょうじよ女によは答こたえました。

「まあ、それはいい子こだ。どれ、その怪我けがをした指ゆびを、私わたしにお見みせなさい。なにか薬くすりをつけてあげよう。」と、おばあさんはいいました。そして、少しょうじよ女によをランプの近ちかくまで連つれてきました。少しょうじよ女によは、かわいらしい指ゆびを出だして見みせました。すると、真まつ白しろな指ゆびか

ら赤い血が流れていました。

「あ、かわいそうに、石ですりむいて切ったのだろう。」と、おばあさんは、口のうちでいいましたが、目がかすんで、どこから血が出るのかよくわかりませんでした。

「さつきの眼鏡はどこへいった。」と、おばあさんは、たなの上を探しました。眼鏡は、目ざまし時計のそばにあったので、さつそく、それをかけて、よく少女の傷口を、見てやろうと思いました。

おばあさんは、眼鏡をかけて、この美しい、たびたび自分の家の前を通ったという娘の顔を、よく見ようとしました。すると、おばあさんはたまげてしまいました。それは、娘ではなくて、きれいな一つのこちようでありました。おばあさんは、こんな穏やかな月夜の晩には、よくこちようが人間に化けて、夜おそくまで起きている家、たずねることがあるものだという話を思い出しました。そのこちようは足を傷めていたのです。

「いい子だから、こちらへおいで。」と、おばあさんはやさしくいきました。そして、おばあさんは先に立つて、戸口から出て裏の花園の方へとまわりました。少女は黙つて、おばあさんの後についてゆきました。

花園には、いろいろの花が、いまを盛りと咲いていました。昼間は、そこに、ちよう

や、みつばちが集まっていて、にぎやかでありましたけれど、いまは、葉蔭で楽しい夢を見ながら休んでいるとみえて、まったく静かでした。ただ水のように月の青白い光が流れていました。あちらの垣根には、白い野ばらの花が、こんもりと固まって、雪のように咲いています。

「娘はどこへいった？」と、おばあさんは、ふいに立ち止まって振り返りました。後からついてきた少女は、いつのまにか、どこへ姿を消したのか、足音もなく見えなくなっていました。

「みんなお休み、どれ私も寝よう。」と、おばあさんは行って、家の中へ入ってゆきました。

ほんとうに、いい月夜でした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「赤い鳥」

1922（大正11）年7月

※表題は底本では、「月夜《つきよ》と眼鏡《めがね》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2014年4月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

月夜と眼鏡

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>